

# 私立全寮制御御堂学園物語 卷4

## 第一章 宣告

「動くな！」

血相を変えて立ちあがった裕と将大を、涌坂は凄みのある怒声で制する。二人は、凍り付く。

高い天井の闇に滲む梁から伸びたロープに首吊りにされ、宙に浮く亮平と純也の苦悶に歪む顔、信じられない程のスピードで蒼白に変わっていく。突っ張った足は置き場なく揺れる。

まるで軍隊のツーマンセルのように、素早く動く涌坂と清家。涌坂は亮平を、清家は純也を背から抱える。亮平はグッタリとし、純也は恐怖に前後を見失って暴れる。清家は無慈悲に彼の下腹部を打ち、動きを止めた。

やがて二人を無造作に投げ出し、涌坂は、腹に響く冷たい声で宣告する。

「どうした、平田君に岡本御曹司君。続きをやれ。死刑はやめにした。あっけなくて面白くない。だが代わりの罰を考えないと。お前ら二人は続きをやれ。半端をやると死刑の続きをやれ。気が変わらないうちに続きだ！」

腹に響く涌坂のややしわがれたバリトン・ボイスだった。

将大は再び膝立ちになり、紅林のペニスを受け入れる。紅林はこの狂気の顛末に呆然としており、突如性器に訪れた温もりに驚いて飛び上がりそうになったほどだった。

裕もまだ治まらない下腹部の苦痛に耐えながら、村原にすり寄った。村原は紅林よりいくばくか冷静だったが……

(……いかれてるぜ。やべえ。だがここまで来たら一蓮托生だ。ついていくしかねえ。頼むぜ清家さん、後始末をよう)

「裕君、まず汚したものを何とかしてもらおうか。お前汚いぜ」

汚水の水たまりの中に跪く自分をあらためて意識し、裕は惨めさをかみしめる。村原は手枷を外し、自分の体操服で床を掃除するよう命じた。指令されるがままに、上着を脱ぎ、全裸になると、裕は床を拭き始める。バケツは最初から涌坂のポストンバッグの横に用意されていた。汚水に汚れた体操服を絞り、また床を拭く。先に脱いでたパンツと体操服のズボンも、汚水の上に無造作に投げられた。それをも《床拭き》に使う。

あらかた床を拭き終えた裕を立たせ、村原は使い捨てのクレンジングタオルを使って、裕の肛門周囲を中心に拭き清めた(基本的に村原は潔癖なのだ)。清涼感が快感をもたらし、裕の股間はまたわずかに膨らみを得る。

(中略)

「神坂君、久保田君、少しは頭がはつきりしたか。ここはあいにく天国じゃない。云うなれば、地獄だ」

(中略)

(そんな……)

(ひどい……)  
俯いて唇を噛み、たまらず声を漏らしたのは亮平だった。

「できない……」

「ん？」

清家は眼鏡を指先で上げつつ亮平を促す。

「できない。いやだ……許して……いやだっ……」

最後は言葉にならない。ぼろぼろと涙をこぼして、肩を震わせ、泣きじやくった。

「できない、と云うんだね。平田君は？」

裕は、目を閉じて唇を噛んで、俯き、言葉はなく、首を振る。裕にはある種の諦観があった。地獄の時もいつかは過ぎる。明けない夜はない。ただ感情と神経を鈍磨させ、時の過ぎゆくのを待とうとしてきた。だが、これは受け入れがたい命令だった。どんな時も、僕を支えてくれた純ちゃん、僕のために口をつぐみ、僕のために一緒に、こんなひどい地獄に堕ちたんだ。逃げることも、誰かに助けを求めることも、一人ならできたのに。その純ちゃんを……  
ただ首を振り続ける裕の目からも、涙がいつかこぼれた。

「先生！」

「……おう」

くわえ煙草の涌坂が、柱の影から姿を現す。

「二人とも、できないそうだ」

「聞き分けのない坊や達だな」

点けたばかりの煙草をプツと吐き出し、靴の踵でもみ消す。

「見ろ。吊られてるお二人もな」

涌坂の手には、彼の腕ほどではないにしろ、清家の腕の太さくらいはあるかもしれない、巨大な張り型が握られている。シリコンゴム製で、雁首の所に妙な顔が浮き彫りにされている他は、まさしく巨大なペニスである。

「後ろのお二人さん。お前らがやらないならかわりにこいつをお友達のケツにぶち込む」

(中略)

「手伝ってやるよ」

(もう、やめて……)

(純ちゃん、ごめん……ごめんなさい、純ちゃん……)

(まあ君……、まあ君……)

「お母さんお母さん、目を覚まして……お父さんお父さん、何か云って、ねえ、ねえ、どうして、黙ってるの……?」

「ゆう坊、ゆう坊！ 誰か！ ゆう坊ッ 誰かあッ！」

……

「感じるのさ。確かに僕はここにいるって」

**本編をお楽しみに！**